生命先端工学専攻・物質生命工学コース　杉本秀樹

9 月 20 日より 10 月 3 日までの期間、昨年度から実施されている国際連携大学院 FD ネットワークプログラムの第 4 回目の派遣グループとして、カリフォルニア州立大学フルトン校（CSUF）を訪問した。私を含め 5 名からなる団体である。2009 年の 4 月に第 1 回目の派遣グループから研修内容の報告があったので、業務内容はだいたい理解していたつもりであるが、主目的は大学院英語コース講義に対する教授方法、教育方法の向上を図るとともに、アメリカにおける教育方針を学ぶことである。研修は、

・ 英語の発音やプレゼンテーション法を目的とする Speciallized English Class
・ 学部及び大学院の講義を見学する Observation Class
・ 講義の組み立て方や学生との接し方を教える Scientific Teaching Workshop
・ 教員について考える Reflective Teaching Workshop

をそれぞれ決まった回数受けた後で、大阪大学における自分の講義・専門内容に近いと考えられる CSUF の教授(Mentor Professor)と協力しながら、実際に学生の前で模擬講義を行うという内容である。研修への参加が決まってから、Mentor Professor 探しが始まり、CSUF および本学事務との間とのやりとりを数回おこなった後で決定された。その後、電話あるいはスカイプを使った CSUF 事務職員との連絡を経て、スケジュールが決定された。現所属研究室の教授が第 3 回の FD 研修に参加していたため、研修について教えてもらったところ、Scientific Teaching Workshop はその回までにはなく第 4 回から新設されたこと（担当教員も新しい人が入っていた)、Reflective Teaching Workshop が多かったこと、現地事務員との電話などを使った連絡はなかったことなどを知り、回数を重ねる毎に、研修内容も改善されていっていることを知った。これは恐らく、研修終了後に回答する FD 研究に対するアンケート集計の結果であろう。Bruce による Reflective Teaching Workshop が一回のみの授業だったのが残念だったが、「教員とは」何かを考えさせられた。Cindy による英語の授業は、前評判が高く、楽しみにしていた一つだったが、期待通りで有意義だった。自分自体にどのような発音の癖があるか、それはどのようにアメリカでは受け取られるかを知ることができて大変勉強になった。英語発音に問題がある状況で、プレゼン内容を理解してもらうためには、どこを注意し、工夫するかを学んだ。Wikki による Interactive、Active Learning のための授業では、インターネットや You Tube をうまく使うことで学生を引きつけることができることや、授業準備に時間を費やすことがいかに重要かを学んだ。Wikki も Cindy におとらず個性的だった。彼女の我々に対する講義にも、十分な時間と手間がかかっていることがよく伝わってきた。事前の情報では、Cindy

からは毎回宿題がある、と聞いていたが、Wikki も毎回やや多目の宿題を出したため、けっこう一日に時間的余裕があるようでなかった。学部における授業見学では、学生とのやりとりが非常に活発であったことが印象的だった。先生から、学生への問いかけが多く、10 分に一回はあったと思われる。学生も恥ずかしがらずに答える。間違っていても、気にしないという感じだった。教員はその間違いを基にさらに、内容をふくらませて進めていた。そのため、授業中に寝る学生はほとんどいない。教員の工夫と共に、高い授業料をはらっているのだ、という気持ちがそのように積極的な姿勢を生み出すのかもしれない。また、授業が週に 2 回あるのも印象的だった。授業見学をする度に、シラバスを配布してもらったが、講義目的、講義手法、成績の評価法にいたるまで事細かに設定されており、内容が充実していた。

メインイベントとなる模擬授業に関しては、私には Mentor Professor が二人割り当てられた。一人は大学院講義を担当し、セミナー形式、日本では、文献紹介と研究報告のみの内容、もう一人は 3 年生対象の生化学を担当していた。他の 4 人には 1 Mentor/一人だったので、貴重な体験をできると割り切ったが、模擬授業の準備を二回分するのは大変だった。さらに、セミナー形式の模擬授業では何をすればよいかがわからず、Mentor に相談したが、返答が「up to you !」だったので、普通のセミナーに準じてしまったのが心残りである。3 年生対象の模擬授業は、楽しく行うことができた。学生も集中して聞いてくれていた。感謝したい。この講義には手話通訳がいたが、私の英語がどのように通訳されたかも興味があるところである。

最後に、本プログラムのリーダーである金谷教授、事務関係でご支援頂いた松本様に感謝いたします。